

街道を歩く

伊勢参宮街道: 02 神戸—白子—磯山

みずがき

彌都加伎神社 (祭神 大土御祖神他)
延喜5年(905)頃山田原の御霊を酒部村に勧請、のちに現在地に遷座し瑞籬村とする農業、窯業、土木関係の信仰が篤い。宝亀元年頃より御厨から御供糍を豊受宮に奉献。今も続く。伊勢の3糍(玉垣村、重坂村、中万村)のひとつ。

大黒屋光太夫

南若松生まれの光太夫(32歳)は天明2年(1782)12月米、木綿などを積んだ神昌丸の船頭として16人の乗組員と共に白子港を出港。伊勢湾にでると風雨が強かったので鳥羽港により翌日出港。

遠州灘で時化に遭い船が壊れ漂流。漂流すること8ヶ月。翌年7月アリューシャン列島アムトカ島に漂着。天明7年(1787)狩猟に来ていたロシア人と共に脱出。カムチャカ島へ。この時9人となっていた。帰国嘆願のため天明8年6月(1788)イルクーツクへ帰国認められず。帰化、日本語教師を勧められる。

幸い皇帝付植物学者キル＝ラックスマンに会い彼の仲介でペテルブルクに行き女帝エカテリーナ2世に謁見、漂流の苦難、望郷の念を語り帰国が許された。(この間9ヶ月)既に12人を失い、2人を残し3人で寛政4年(1792)8月オホーツクに戻る。遣日使節団と共にエカテリーナ号で9月13日オホーツクを出港—根室—函館着く。漂流から10年。帰国後は江戸番町の菓草園に軟禁。苗字許された大黒屋は享和2年(1802)20年ぶりの帰郷。文化11年、78歳で病没

北の端の地藏

鎌倉時代(1192-1333)のもの石像の周りに6地藏が刻まれている。江戸時代”北の端の地藏”と呼ばれ、伊勢型紙の行商に出る人は道中の無事を祈願したという。



江島若宮八幡宮 (祭神 仁徳、応神天皇、神功皇后)

醍醐天皇が(897-930)神意に問いて伊勢宗廟の戌亥の方なるこの地に奉遷。街道の集落の氏神様として、近くに白子港があり廻船業が盛んであったので海上の守護神として信仰が篤かった。信仰の形として多くの絵馬が奉納された。今も百二十余が残り、七十一面が県文化財

家康無事脱出 (白子港)

本能寺の変を泉州堺で知った家康は急遽山国村から木津川を渡り、宇治川の上流を経て江州信楽—柘植—亀山—白子へ神戸城主信孝の警戒する中、農夫に頼み出港、常滑に上陸、半田—岡崎—駿府に無事着く。出港の際の守り神としていた1寸8分の観音像を江島若宮八幡宮に奉納し海上安全を祈願したという。

久留真神社

当初は伊勢の森(現白子御殿町)に鎮座。寛永11年(1634)現在地に遷座。古くは福德の神として”福德天祖社”と呼ばれていた。当地は栗真荘であったので文政4年(1821)”久留真神社”となる。21代雄略天皇の時伊勢国に漢織姫を迎え機織の技術指導を受ける。その功績を讃え姫を合祀。”栗真荘”の由来は機織の糸車。

子安観音寺 (真言宗白子山観音寺)

白子浦の海中より鼓の音がしたので網を入れたところ鼓に乗って白衣観音が現れたのでお堂を建て安置したと言う。子授け、安産信仰で知られている。境内には元禄16年(1703)建立の仁王門、年中葉や花を絶やさない不断桜(国天然)俳人山口誓子の句碑などがある。[弥次・喜多]子安観音の別れ道にて”風を孕む沖の白帆は観音の加護にやすやす海わたるらん”

磯山の立場

茶屋などがあった。八幡神社。磯山3。磯山1。磯山駅。

[弥次・喜多] 弥次さんよろけたひょうしに犬の足を踏み咬まれて転ぶ、前にたばこ入れが落ちていたので拾おうとするとスルスルと動く。子供が糸で引いていた。



彌都加伎神社



光太夫頭彰碑



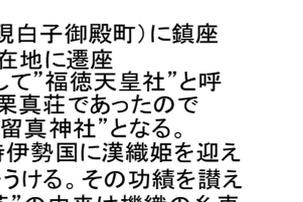
大黒屋光太夫資料室 (若松小学校内)



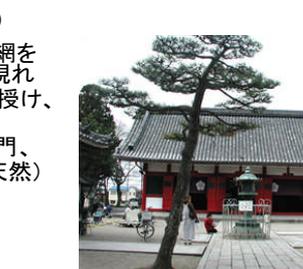
江島若宮八幡宮



江島神社社標



久留真神社



子安観音寺